

光明寺だより

第92号

浄土真宗本願寺派

光明寺

〒793-0030 西条市大町550

TEL 0897-53-4583



本年4月14日発生した「熊本地震」により被災された皆さまに
衷心よりお見舞い申し上げます

心に残る詩

心構え

岡山県 山崎範雄

79



若い頃には
昨日のような
今日ではないけない
明日ではないけない
と努力した

年老いた今は
昨日のような
今日でありたい
明日でありたい
と願うようになった

産経新聞「朝の詩」より

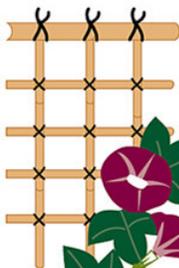
新盆合同追悼法要

8月13日・14日

両日とも

1回目 18:30より

2回目 20:00より



一口法話

自分の事として聞く



江戸時代末期に活躍された真宗大谷派の名僧・香樹院徳龍（1772～1858）師に次のような逸話が残されています。

ある時、香樹院徳龍師が昌平饗（幕府の学問所）の総長をしておられた林大学頭と会見されたことがあります。ひとしきり会話が弾んだ後、大学頭が次のようなことを言ったそうです。

「私は聖人の教えによって修養につとめる儒者でありますから、今更地獄極楽の喩え話で勸善懲悪を説く仏教は必要ではありません。けれども、世の中には無知文盲の者もたくさんいることです。そういう人たちのためには仏教も随分役に立つことでしょう。どうかご自愛の上、しっかり世の中のために尽力ください。」

大学頭としては、これでよほど好意的な意見を述べたつもりだったのかも知れませんが、ところがこの言葉を聞いた香樹院は、キツと形を改め、「こう言われたそうです。」

「お言葉ではありませんが、地獄極楽は決して喩え話ではありません。極楽のことはさ

ておき、少なくとも地獄とは、他ならぬあなたのようなことを考えている人たちの墜ちるところであると、私はかねがね聞いております。」

大学頭はこの言葉に大いに感ずる所あり、以来、香樹院師のお説教を真剣に聴聞されたと言われています。後に香樹院師は、「よき弟子を設けたり」と仰られたそうです。

いわゆる識者と呼ばれるような人は、よく世の中の道義の退廃を嘆いて、仏教の必要性を語ることがあります。ところがどういふ訳か、そういう人に限って自分では仏法を聞こうとしません。これは仏教の本質を理解していないからだと思えます。

仏法を聞く上で何より大事なことは、あくまで自分の事として聞いていくということです。自分が問題にならなければ、地獄極楽もただの喩え話になってしまいます。

特に、お念仏の教えは他ならぬこの私が救われる道を説いています。

なぜ救われねばならないのか？

それは今、現に私が迷っているからです。

ところが私たちは「自分は迷っている」という自覚はありません。それどころか、「自分は正しい。自分は間違っておらん」という我執を軸に、他を裁くことしかしない、そんな愚かな迷いの生活を続けているのです。

だからこそ、この教えを自分の事としてしっかりと聞いていく必要があるのです。

仏法を聞くというのは、阿弥陀さまの智慧の目に見抜かれた私を聞いていくということです。平たく言えば、ごまかしのきかぬ目の前に座るといことです。「たとい他人はごまかせてもこの仏は見抜いておるぞ」という仏さまの前に座るといことです。

そうすることによって初めて「迷っているのは他でもないこの私であった」ということに気づかされるのです。

親鸞聖人は、「いずれの行も及びがたき身なれば、とても地獄は一定住みかぞかし」『歎異抄第2条』と仰っています。つまり「どんな立派な行ないも出来ないこの私（親鸞）は、地獄以外、行き先はありません」と告白されているのです。

「地獄」とは、親鸞聖人が仰るように、今、現に作りつつある私の行ない（因）の結果（果）として生じる世界のことをいいます。

昔の歌に次のようながあります。

火の車 作る大工は無けれども
己が作りて己が乗りゆく

火の車（地獄）を作るような大工はいないけれども、自分が作って自分が乗っているという歌です。つまり地獄とは自分が作って自分が墜ちていく世界ということなのです。ですから、客観的にながめて、地獄は有るか無いかと議論するようなものではなく、

今この私が何を作っているか、そのことを問うていくべきことなのです。

地獄には閻魔大王えんまがいて、獄吏ごくりにとして赤鬼、青鬼がいると言われます。

閻魔とは自分を是よしとして他を裁く心です。

赤鬼は燃え上がる瞋恚しんに(怒り)の心です。

青鬼はあくなき貪りむね(貪欲)の心です。

はたしてそんな心はどこにあるのでしょうか。それは他でもありません、私の心そのものです。

そこるところを、親鸞聖人は次のように述べられています。

凡夫というは無明煩惱われらが身にみちみちて、欲も多く、怒り、腹立ち、嫉み、ねたむ心多くして、臨終の一念に至るまで、止まらず、消えず、絶えず

『一念多念証文』

いのち終るまでこの煩惱の束縛から脱け出ることが出来ないと言っているのです。まさに「地獄は一定すみかぞかし」です。

この私の姿は、阿弥陀さまの智慧に見抜かれることによって気づかされる私の姿なのです。それは、「お前は迷うておるぞ。地獄に墜ちるぞ。そのことに早く気づけよ」という私の目覚めを促す阿弥陀さまの言葉であります。

この厳しいお言葉を頂く時、私の心に唯々「お恥ずかしいことです」、という慚愧ざんきの念が生まれます。

そうしてさらに大事なことは、この言葉の裏には、「だからこそ、救わずにはおれないんだよ」という阿弥陀さまの慈悲の心がはたらいっているということです。

阿弥陀さまは、地獄一定の私の姿を見抜く(智慧)ことによって、「お可哀そうに。見捨ててはおけない。救わずにはおれない」という心(慈悲)を起されるのです。

真実の智慧には必ず慈悲が伴うのです。

この阿弥陀さまのお心(慈悲心)を頂く時、私の心に「ありがたいことです」という歓喜きの念が生まれます。

「慚愧ざんきと歓喜かんき」、この二つの念おもいが念仏者の心に同時に起るのです。

これは、「救われるはずのない身」だと知ること(慚愧)と、「救われる身」だと知ること(歓喜)が、一人の人間に同時に起ることという事です。

救われるはずのない者が救われる、ここに、一人漏らさず救うという阿弥陀さまの救いの法のまことに優れたところがあるのです。

こうして念仏者は「慚愧と歓喜」の念おもいを持ちながら、どこまでも謙虚でしかも喜びにあふれた人生を送っていくのです。まさに、それは仏法を自分の事として聞いていくことによって実現する人生です。

言葉のプレゼント



自らの愚を知らない者こそ
真の愚者である

釈尊



「光明寺だより」を、ご家族の皆さんで
お読みください



次回発行予定：11月下旬

熊本地震発生！

本堂全壊6カ寺 418カ寺被害 門信徒16人死亡



★全壊した益城町の専寿寺の本堂

本年4月14日、熊本県を中心に発生した「熊本地震」は、九州の広範囲にわたり甚大な被害をもたらしました。

本山では地震発生後、直ちに災害対策本部を設置し宗門内の寺院、門信徒の被害状況の収集を行っています。5月3日現在、熊本県益城町（震源地）にある3カ寺の寺院を含む6カ寺の寺院の全壊。熊本、大分、佐賀、長崎、福岡、宮崎の6教区で合せて418カ寺の寺院の建物の被害。門信徒

18名の死亡が確認されています。現在、熊本教務所に現地緊急災害対策本部を設置し、本山の対策本部と連携をとりながら、支援活動を進めています。また下記の要領で義援金の募集を行っております。

〔熊本地震義援金募集〕

郵便振替

01000-4-69957

加入者名：たすけあい募金

*通信欄に「熊本地震」と記入

★問い合わせ

本山・社会部（災害対策担当）☎075(371)5181

光明寺のホームページ

南岳山光明寺

検索



「春の彼岸会法座」勤まる



本年3月23日(水)、小林顯英先生をお招きして、「春の彼岸会法座」が開催されました。

先生は現在本山のお茶所に定期的に駐在され、観光客などの参拝者に阿弥陀と御影堂の案内をしながら、お念仏の教えや歴史、建物の見どころなどの説明をしておられます。よく参拝者から、南無阿弥陀仏の南無の文字を見て、「仏さまはなぜ南にいないのか?」とか「悪いことをした人間が浄土真宗では何故救われるのか?」という質問をされる

ことがあるそうです。そんな見学者に対して先生は次のようにお話をされたそうです。

・・・「南無」は仏さまが南にいないという意味ではなく、ナマスというインドの古い言葉に漢字の音を当てはめたもので、訳すと「帰命」という意味になります。帰命の「帰」は帰依する、従う。「命」は命令、仰せという意味で、「南無」は仰せに従うということです。つまり南無阿弥陀仏とは「阿弥陀さまの仰せに従う」という意味になるのです。

阿弥陀さまの仰せとは「そのままのあなたを引き受けたから安心して任せよ」との仰せです。「こうしなければ救わない」とは仰らないのです。つまり条件を付けません。無条件のお救いなのです。なぜ無条件なのか?それは条件を付ければこの私が救いから漏れるからです。阿弥陀さまは、他のすべての人を救うことが出来ても、あなた一人を救うことが出来なければ私は阿弥陀とはならないと仰っているのです。その大悲のお心をいただく時、唯々「かたじけないことです。ありがたいことです」とその仰せに従うばかりです。しかも、この無条件の救いをいただく時、悪人とは他でもないこの私でしたという慚愧の心を起こさせてくださるのです。「歡喜と慚愧」これが念仏者の歩む人生です。

彼岸会法座

9月17日(土)

おつとめ 13時30分
おはなし 14時

【講師】尾道市・法光寺住職

季平博昭先生



趣味の広場



俳句を楽しむ(七十一)

森本隆を

これまで「光明寺だより」今号は、七月を中心に六月とか八月に発行されています。今回は七月発行ということであり、最近五年のこの欄の話題を振り返ってみました。やはり時期的に「梅雨」、「土用」、「猛暑」など時候の話題や、「ゆかた」、「夏料理」、「簾」、「夏座敷」といった生活的なテーマが多かったようです。今回は、ずばり「七月」というテーマで俳句的な話題を拾ってみましょう。七月は「文月」とも言い陰暦では秋季に分類しますが、陽暦ではほぼ晩夏に位置づけされ、体感的には最も夏というのにぴったりの月ですね。七月初旬に梅雨が明け、高温多湿の厳しい暑さの日々が続き、まさしく本格的な夏を迎えるのが七月です。

七月や既にたのしき草の文 日野 草城
 七月の青嶺まぢかく溶鉢炉 山口 誓子
 七月の夜に入る山のくるみの木 嶺 治雄
 七月の嶺の底なる津和野かな 浅井 凌一
 先ず「七月」というそのものずばりの季語から詠み始めた例句をあげてみました。いづれも暑さに負けてないですね。一年で一番暑い時を迎え、植物の生命力や人間の生活の力強

さ、みどりの山河などを讃えた極めて健康的な句ばかりです。「梅雨明け」という自然界の一つの区切りがポイントのようです。六月下旬頃の沖繩の梅雨明けから七月下旬の東北地方に至る約一カ月の間に、日本列島各地で梅雨明けを迎え、雨続きのうっとうしい暮しから開放された喜びが大きいのかも知れませんが。

沖繩は浮かぶ花東梅雨明ける 川崎 展宏
 梅雨明けや深き木の香も日の匂 林 翔

梅雨明けのただちに蟻の影の土 井沢正江
 たしかに「梅雨明ける」、「梅雨あがる」といった季語の持つ、明るい陽の光を喜ぶ心のひびきが俳句から伝わってくるようです。ひと昔前と違って最近では冷暖房機器や除湿機、乾燥機などが私達の身のまわりを快適にしてくれているので、いわゆる「夏負け」、「夏痩せ」等の季語が余り活躍していません。

七月は、陰暦六月すなわち異称「水無月」であります。暑さはげしく水がかれ、地上に水が無くなる月、ということからこう呼ばれたとされています。俳句の世界でも「水無月」は季語であり、受け取り方は「暑さ最もさかなな時」とされ既に晩夏の雰囲気ただよふ頃とされているようですが、別な表現として「風待ち月」、「青水無月」があり、やはり、涼風を楽しみ、万緑の山野に力をもたせて暑さに立ち向かおうとする人々の意志を感じます。

水無月の魚に塩を効かせたり 鈴木真砂女
 誕生日すぎし水無月ただ真青 井沢 正江

鐘撞けば青水無月の風流る 富田佐知子
 初めての道も青水無月の奈良 皆吉 爽雨
 水の豊かな我が日本は猛暑だ酷暑だと言いな
 がらもその夏は、梅雨期の雨のおかげで河川は
 悠々たる流れであり、山も野も草木の緑にむせ
 返るようであり、大陸の砂漠の夏とはまるで
 違った夏ですね。夏には夏の楽しみを見つけ、
 やがて来る実りの秋にそなえる、そんな日暮し
 を考えましょう。子供や青年には彼らなりの、
 そして壮年には壮年の、老人には老人の、そ
 ぞれの夏があるのです。元気で夏を過ぎしま
 しょう。



位職書作品



【字句】

無客尽日静

有風終夜涼
白居易の句

白居易の句

BOOK 本

『田中角栄100の言葉』



発行所 株宝島社
編定 宝島編集部
者価 1000円+税

比類なき決断力と実行力で激動の戦後政治を牽引

した希代の政治家・田中角栄氏の100の言葉が紹介されています。世界の要人から庶民まで、あらゆる人間を魅了し続けてきたその言葉には、今あらためて傾聴すべきものがあります。一部を紹介いたします。

「必要なのは学歴ではなく学問だよ。学歴は過去の栄光。学問は現在に生きている」

「手柄はすべて連中に与えてやればいい。ド口は当方がかぶる。名指して批判はするな。叱る時はサシの時にしろ。ほめる時は大勢の前でほめてやれ」

「祝い事に遅れてもいい。ただし葬式には真っ先に駆けつけろ。本当に悲しんでいる時に寄り添ってやることが大事だ」

「人の悪口は言わない方がいい。言いたければ便所で一人で言え。自分が悪口を言われた時は気にするな」
「失敗はイヤというほどした方がいい。そうするとバカでない限り骨身にしみる。判断力、分別が出来る。これが成長の正体だ」



満開の桜を背にする顕彰碑
碑の左に案内板、右に標柱 (安永省一氏撮影)

常真法師顕彰碑に「案内板」設置

常真法師顕彰碑の横に市教育委員会・史談会のご協力で案内板が設置されました。案内板には碑のいわれと、碑に彫られた言葉の説明が詳細に解説されています。

《案内板の言葉》

今からおよそ四百年前、光明寺住職入江常真は、時の城主加藤嘉明かとうよしあきの命を受けた普請奉行足立重信あだちしげのぶと協力し、氾濫を繰り返していた加茂川を現在の流れに改修したとされる。工事の時期は慶長五年(一六〇〇)から寛永四年(一六二七)の間と考えられ、常真法師はその功績によって寺地を賜り、常心の地名は法師の名に由来するものだという。

この顕彰碑は、それから三百年後の昭和三年、常真法師の功績を忘れまいと郷土の医聖眞鍋嘉一郎まなべかいちろう先生、西条郷土博物館初代館長田中大祐たなかだいすけ翁が中心となり現在地より南東約一キロメートル(大町大南)に建立したものであるが、諸事情により平成二十七年十月ここに移設した。移設は光明寺檀家・西条史談会・一般有志者からなる「常真顕彰碑保存会」と西条市により行った。(後略)

西条市教育委員会



★4月14日発生した熊本地震は宗門関係の寺院や門信徒に甚大な被害をもたらしました。6月に入り異常な大雨による水害や土砂災害で、さらなる厳しい避難生活を強いられています。一日も早い復旧、復興を心から願うばかりです。 (*関連記事4ページ)

★3月23日(水)小林顯英先生をお招きして春の彼岸会法座が開催されました。25名の参拝者がありました。 (*関連記事5ページ)

★常真法師の顕彰碑の横に、教育委員会、史談会のご協力により案内板が設置されました。 (*関連記事8ページ)

★5月24日ご門主は塩屋別院をご巡拝されました。本堂は430名の参拝者で満堂になり、本年10月より始まる伝灯奉告法要への参拝を呼びかけられました。また讃岐うどんの手打ちを体験されるなど、和やかなご巡拝となりました。